二　七年間の動き

教員スタッフ

教員スタッフは学年進行とともに、徐々に拡充された。ポーランド語専攻では九二年四月に東京工業大学から関口時正助教授（ポーランド文化）が、翌九三年四月には大東文化大学から小原雅俊教授（ポーランドのユダヤ人の歴史と文化）が着任。チェコ語専攻では九二年四月に金指久美子助手（スラヴ語学〈九八年四月講師昇任〉）が採用されたあと、九四年三月千野栄一教授が定年により退官。九六年四月、東京学芸大学から篠原琢講師（十九、二十世紀チェコ史）が着任した（九五年四月から一年間は併任）。

この結果、九五年四月の大講座制への移行後、ポーランド語専攻では三つの講座（言語・情報、総合文化、地域・国際）に一名ずつ教官が配置されることになったが、チェコ語専攻は総合文化講座の専任教官を欠く状態が続いている。さらに残念なことに、両専攻語とも、現在のところ外国人教師の定員が認められていない。ネイティヴ・スピーカーはポーランド語、チェコ語とも三名ずついるが（一九九八年度の場合）、すべて非常勤講師である。

専任スタッフの少ない両専攻にとって、ネイティヴ・スピーカーを含めた非常勤講師の存在はカリキュラムの充実化に不可欠であった。開設以後の七年間に出講した非常勤講師は次の通りである（順不同、敬称略）。

ポーランド語専攻――鈴木エルジベータ、石川グラジナ、鈴木輝二、井内敏夫、三井レナータ、宮島直機、泉ボグミワ、長谷見一雄、白木太一、柴理子、久山宏一、田口雅弘。

チェコ語専攻――飯島周、ダグマル・アメモリオヴァー、林忠行、広瀬佳一、千野亜矢子、中島由美、長與進、橋

卒業者数

年度＼専攻	ポーランド語（男女内訳）	チェコ語（男女内訳）
1995（平成7）年3月	6名（1：5）	8名（2：6）
1996（平成8）年3月	10名（2：8）	14名（6：8）
1997（平成9）年3月	14名（6：8）	13名（5：8）
1998（平成10）年3月	19名（7：12）	15名（4：11）
合　　計	49名（16：33）	50名（17：33）

本聡、横井雅子、立古ダニエラ、伊東一郎、岩井憲幸、村田真一、マルチナ・バラートコヴァー、三谷恵子、沼野充義、木村英明、薩摩秀登、稲野強、西成彦、長場真砂子、寺島憲治、小澤弘明。

なお現在、主専攻語の授業科目は別として、講義科目のほとんどがロシア・東欧課程の全学生を対象に開講されている。

その他

一九九五年三月、ポーランド語・チェコ語専攻の初めての卒業生を送り出した。以後、四年間の卒業者の総数は両専攻合わせて九九名。内訳は表の通りである。

大学の社会的貢献の一環として、ポーランド語・チェコ語専攻ではこれまでに二度、一般市民を対象にした公開講座を実施している。一九九三（平成五）年度は専任スタッフ全員によるリレー式講義「ポーランドとチェコの言語と文化」が、また一九九七（平成九）年度には語学講座「ポーランド語初級」が行われ、どちらも熱心な受講者を得て好評であった。

一九九四年以降、ポーランド、チェコそれぞれの在日大使館が主催あるいは後援するスピーチコンテストが毎年行われ（ポーランド語は九六年を除く）、本学の学生が積極的に参加している。学長表彰の栄誉に輝いた上位入賞者も少なくない。

この七年間に学外の多くの方々から図書の寄贈があった。とりわけ故吉上昭三・内

田莉莎子夫妻の遺族からは、二人の厖大な蔵書を本学に寄贈したい旨の申し出があり、本学はこれをありがたく受けることになった。府中への移転後には吉上文庫として広く教員・学生の閲覧に供される予定である。ちなみにポーランド文学者の吉上昭三はかつて非常勤講師として本学大学院でポーランド語を担当したことがあり、また児童文学者として活躍した内田莉莎子にはロシア語、ポーランド語、チェコ語からの数多くの翻訳作品がある。

参考資料

・「祭典のわき役さん　ソウル五輪を支える④」一九八八年七月六日付け朝日新聞朝刊
・千野榮一「チェコ語コース開設の念願かなう」一九九一年三月五日付け朝日新聞夕刊
・原卓也「客人を迎えて」月刊『現代』、講談社、一九九二年四月号
・吉上昭三「ポーランド文学と加藤朝鳥」『ポロニカ』創刊号、恒文社、一九九〇年八月